

令和 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K12836

研究課題名(和文)近代日本における教祖像形成に関する総合的研究--最澄・空海・親鸞・日蓮--

研究課題名(英文)Comprehensive Research on the Formation of images of Buddhist founders in Modern Japan:Saicho, Kukai, Shinran, Nichiren

研究代表者

大澤 絢子(Osawa, Ayako)

東北大学・国際文化研究科・JSPS特別研究員(PD)

研究者番号：50816816

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本における仏教の教祖(宗祖)イメージの再編成には、教団内の教義や伝統と一線を画すアカデミズム(歴史研究)と社会(特に文学)の双方が関わっている。例えば親鸞は、明治以降、史実の検証により歴史上を生きた生身の親鸞が明らかにされていく一方で、この「人間親鸞」が文学の主題となっていく。

近代日本の教祖像の形成過程で見られたのは、史実と創作の言説がときに重なり合い、歴史を叙述する語り手と受け手の関わり合いによって生み出される複雑な形態であった。本研究を通して、教祖像形成の具体的なプロセスや教祖間の相違を明らかにし、日本仏教史の全体像の再構築に向けた基盤の整備ができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

宗教者のイメージに関しては近年、西洋における釈迦像や日本の釈迦像が、伝記や文学、映画等を通していかに変化し、受容されてきたのかを解明する研究が評価されつつある。しかし、日本では釈迦よりも中心的な位置を占める各宗派の教祖のイメージ形成に関する研究は極めて少なく、史実を検証する近代的学問の影響力が過大に捉えられる傾向にある。

そのような現状において、教祖像形成における歴史研究と創作の関係性やその実態を問う本研究は、学術的に大きな意義がある。教祖像は、「作家・学知・大衆・教団」の間の交渉を通して形成されており、研究はこうした特異な日本の宗教の動態を理解することにも貢献する。

研究成果の概要(英文)：The reorganization of images of Buddhist founders in modern Japan has the influence of both academism (historical research) and society (especially literature), which are distinct from the doctrines and traditions within the sect. For example, Shinran's history comes to light through verification of historical facts, and this "human Shinran" becomes the subject of literature.

In the formation of the images of the founders of modern Japan, sometimes historical facts and fictional discourses have been overlapped and created complex forms through the participation of narrators and listeners who describe history of founders. Through this research, I clarified the specific process of formation of Buddhist founders' images in modern Japan and how the formation process differs depending on founders. I also prepared a foundation for reconstructing the overall image of the history of Japanese Buddhism.

研究分野：歴史学・思想史

キーワード：教祖像 歴史小説 歴史研究 表象 大衆文学 演劇 メディア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「教祖がいかに語られたか」という課題は、近年特に注目されつつある。グローバル化のなかで近代的な宗教概念の構築が問われる昨今、宗教概念の西洋中心主義的な性格が疑問視され、欧米でも教祖像の受容に関する新たな研究成果が発表されている。

研究代表者はこれまで、教祖像の形成過程という問題を日本宗教史の課題に寄せ、浄土真宗という日本最大の宗教組織の教祖・親鸞(1173～1262)イメージの形成過程に焦点を当ててその通史的な展開プロセスを明らかにしてきた。

そこで明らかとなったのが、特に日本近代では、史上の人物としての教祖のイメージが教団内の教学的な問題を越えて、教団とは一線を画したアカデミズム(歴史学)や一般社会(特に文学)からの影響を受けつつ再編成されてきた点である。この問題をさらに追究するため、本研究では、近代において「大衆文化としての教祖像」がいかに形成されたか、との問いを立て、近代日本における仏教の教祖(宗祖)像の形成プロセスの実態解明を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、歴史学と文学の関係性の検証を通して、近代日本における仏教の教祖像の具体的な形成プロセスを明らかにすることにある。すなわち、教団内の教祖イメージや、「歴史学 文学」の一方的な関係だけでなく、「文学 歴史学」の方向性も考慮した上での近代日本の教祖像形成の総合的な解明が、本研究の主眼である。本研究を通して、近代日本において教祖像が形成されてきた意義を解き明かすことをめざした。

3. 研究の方法

方法としては、日本仏教の主たる教祖(最澄・空海・親鸞・日蓮)の史実を検証した近代歴史学の言説と、彼ら教祖を題材とした近代文学の記述の言説分析を行った上で、両者の関係性を検討する。研究対象となる時期は、実証主義的な近代歴史学が発達する一方で、小説や雑誌も含む歴史を叙述する大衆文化メディアが一般化していく明治末から昭和期とする。

4. 研究成果

本研究の主な成果としては、近代日本の教祖イメージに関する資料収集・整理、研究成果の発表(論文・書籍・学会報告等)、国際シンポジウムの開催が挙げられる。本研究では、「仏教者の表象」や「出版メディア」「ジェンダー」といった視点も取り入れることで、教祖像の形成プロセスの総合的把握に取り組んだ。

研究の出発点として、本研究ではまず、伝記の数が多く、かつ、明治以降に文学作品のなかで最も多く取り上げられてきた親鸞の史実に関する歴史研究上の成果と、親鸞を題材とした文学作品の年代別目録リストを作成した。

その上で、大衆文学と親鸞像との関わりに関して、吉川英治の親鸞像と日本主義思想との関係を検証し、その成果を「吉川英治と日本主義——修養する武蔵と親鸞」(石井公成監修/近藤俊太郎・名和達宣編『近代の仏教思想と日本主義』法蔵館、2020年)として発表した。ここでは、吉川が1938年に刊行した『親鸞』の戦後の改訂箇所を比較検証した上で、『親鸞』と同時期に新聞小説として連載されていた『宮本武蔵』との共通点を明らかにした。吉川の親鸞像は、「煩惱と闘争」の生涯を歩み、自己研鑽をつづける修養型の人物である。この点は戦後版でも変更されていない。一方、吉川の武蔵像には、明治期の仇討ちに大正期の武者修行の要素が組み合わされ、そこへさらに修養的な要素が加えられている。この武蔵像は、吉川の親鸞像にも重なっている。

時代状況へ対応という課題のなかで、煩惱と対峙し、自己研鑽を続けながら民衆と共に歩いていく親鸞は、吉川の理想でもあり同時に、吉川作品を読む多くの読者の要望するものでもあった。この親鸞像は、アカデミズムや教団によるものとは異なり、作家と読者が強く結びついた大衆文学が持つ独自の性質を有していることについて、具体的に明らかにすることができた。

初年度はさらに、本研究の主題の一つである物語と日本宗教の関係についての解説を執筆し（岩田文昭・碧海寿広編『知っておきたい日本の宗教』ミネルヴァ書房、2020年）、僧侶の妻帯や仏教とジェンダーに関する最新の成果3冊の書籍の書評を執筆した。この作業により、僧侶の妻帯という、親鸞像に特徴的な事象を通して日本仏教の現代的な課題を多角的に検討できた。

次年度以降は、親鸞の性欲に関する歴史研究と、文学の相互関係の有無を検証してその成果を発表し（「性に悩む親鸞像の形成——近代日本における歴史研究と文学の相関」第80回日本宗教学会、2021年9月）、親鸞の家族や性欲の問題が注視されていく経緯を明らかにした（「妻帯する親鸞——近代日本の僧侶家族論」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第39号、2022年3月）。ここで「親鸞の妻帯」をめぐる近代の歴史研究と近代文学の記述と年代的傾向を検証していくなかで浮上してきたのが、メディアを通して構築された親鸞と恵信尼の夫婦イメージに、近代的な家族観・女性観が含まれている点である（「物語る」近代歴史研究——親鸞と恵信尼はなぜ夫婦なのか」『学際日本研究』第1号、2021年）。

そこで焦点となるのは、親鸞の史実を明らかにする実証主義にもとづく歴史学と、親鸞を題材とした文学の相互作用の可能性である。文学上では、とくに1921年前後に生じた親鸞流行期のなかで、親鸞の性欲に焦点が当てられ、「性に悩む親鸞」イメージが形成されていく。この時期はとくに、親鸞の青年期（出家～流罪まで）に焦点が当てられ、六角堂参籠前後の親鸞の悩みが、性欲の問題を中心に語られる。その後、先述した吉川の『親鸞』（1938年）や丹羽文雄の『親鸞とその妻』（1960年）でも、性欲に悩む親鸞が語られるが、これらの作品は創作である以上、親鸞の性をどう描くかは作家の自由である。注目したいのは、実証主義的な歴史学により親鸞像の構築が目指された昭和30年代においても、親鸞の性欲が記述されるようになることである。2000年代以降には、顕密僧の妻帯状況を踏まえて親鸞の性や妻帯の問題を問い直す研究も提出されているが、親鸞と性欲の悩みを結びつけた歴史研究も依然として見られる。

性や妻帯といった、教祖の人間性が注視されていくプロセスについて概略を述べれば、教祖のなかでもとりわけ多くの創作の対象となってきた親鸞は、13世紀末成立の『親鸞聖人伝絵』をはじめ中世から近代にかけて教団内外の物語を通じて形成されてきた。しかし、明治以降、実証主義的に基づく歴史学の立場から、それら物語の記述が批判的に検証されるようになる。史料批判や史実の検証に伴って神秘的な要素の排除された生身の「人間親鸞」が見出され、この人間親鸞が倉田百三の『出家とその弟子』（1917年）のような文学の主題となっていく。とりわけ大正期において、青年期の親鸞像が中心に描き出されていくことは重要である。

この点について、本研究ではとくに、親鸞の性がいつ、どのように語りだされたのか、その際、歴史研究と文学の間に何らかの関係性が見られるかを検証したが、結論として、親鸞の性欲の描写について、歴史研究と文学との明確な相互関係が見られるわけでない。だが、親鸞の妻帯や性をめぐる歴史学者たちの記述からは、研究者の価値観によって親鸞像が構築されてきた側面も否定できない。とくに親鸞の場合は史料から確実に言えることが少ないため、歴史上を生きる「人間親鸞」の解明を目指した結果、非合理的な要素が排除され、史料のない部分は空白とならざるを得ず、この空白に研究者の価値観や「語り」が挿入される可能性もある。課題としては、こうしたことが史実に関する史料の少ない親鸞特有の問題なのかや、自らの人生について多くを書き残した日蓮との違いはあるかといった課題がある。

そこでさらに、親鸞像と日蓮像の形成過程の比較を行い、この成果を共著論文のなかで発表した（「日本における仏教文化と聖者像に関する総合的研究」『世界仏教文化研究論叢』第60集、2021年）。歴史上の親鸞に関する検証が進む明治後期、親鸞を語る新たなテキストとして注目されるようになったのが『歎異鈔』である。1911年刊行の『歎異鈔講話』で暁烏敏は、史実上の親鸞にこだわらず、また極端な神秘化をせずに『歎異鈔』の言葉を通して親鸞を語っている。前年に刊行された佐々木月樵の『親鸞聖人伝』（1910年）においても、歴史学的手法を批判しつつ信仰の立場から、悩み多く道を求めた親鸞を語り、如来の化身ではない生身の親鸞の体験に、佐々木自身の思いが重ね合わされていった。

その後、大正期には、倉田が『出家とその弟子』で史実にも信仰にもとらわれない「私の親鸞」を表明し、親鸞の苦悩や悲しみを表現した。同作が人気を博したことで、大正中期には親鸞を取り上げた小説や戯曲の流行現象が起こり、多くの作品が青年期の親鸞を取り上げ、妻帯や性などの悩みに焦点が当てられながら、求道的な人間親鸞のイメージが固められていったのである。

一方、近代の日蓮像は、小川泰堂による『高祖遺文録』と『日蓮大士真実伝』（以下『真実伝』）の刊行が大きな契機となった（石川康明『日蓮と近代文学者たち』1978年）。慶応三（1867）年刊行の『真実伝』は、絵入りの平易な語り口で日蓮像の普及に大きく貢献し、従来の日蓮伝の構成を大きく変えずに超人的・神秘的日蓮像を強調し、夢想や勸善懲惡、奇瑞を描く近世の文学や在家信者の祖師伝を折衷しながら、日蓮像が再構成されている（冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』1983年）。重要なのは、明治以降も『真実伝』が圧倒的な人気を持ち続けたことである。『真実伝』を元にした歌舞伎（『日蓮大菩薩真実伝』1881年初演）も上演され続け、『真実伝』で打ち出された超人的で神秘的、蒙古を調伏する日蓮のイメージが、近世から近代へと引き継がれていく。

親鸞像の近代化が脱神秘化・人間化であったのに対し、日蓮は、神秘的な高僧としてのイメージが近代にも継承された。そして一方では、史実考証を踏まえた脱神秘化とともに、日蓮の新たな神話化もなされていった。例えば、大正期には、姉崎正治が宗教学という近代的学知から「法華経の行者日蓮」を記述し（『法華経の行者日蓮』1916年）、妹尾義郎ら日蓮主義者を中心に、求道者としての人間日蓮に焦点が当てられていく。脱神秘化の過程において、親鸞も日蓮もその求道的側面が強調されていった点は注目に値する。

ここで浮かび上がった日蓮の神秘性／人間性という点に着目し、政論家で劇作家、小説家の福地源一郎（桜痴）による1904年上演の「日蓮記」を対象に、歌舞伎で演じられた日蓮像の実態と、近世から近代への連続と非連続を、脚本・役者・舞台・観客の4つの観点から解明した。その成果が（「演じられた教祖 福地桜痴『日蓮記』に見る日蓮歌舞伎の近代」『近代仏教』第29号、2022年）である。日蓮は、江戸期の段階でもすでに浄瑠璃や歌舞伎でも演じられていたが、近代の制作や上演をめぐる研究は十分とは言えない。ここで、伝記や小説などで「語られた」教祖だけでなく、教祖が教団の外側で、生身の人間によって「演じられた」際の変化を問うことで、教祖像が形成されていく過程の実態を多面的に明らかにすることができた。『日蓮記』で日蓮を演じた九代目市川團十郎と脚本を書いた桜痴は、史実によせた人間日蓮を表現しようとしたが、当時の新聞記事等によれば観客には不評だった。先述のように、日蓮も親鸞と同様、明治以降に史実が明らかにされつつ人間日蓮に焦点が当てられていくが、日蓮の場合は彼の起こした奇跡や奇瑞に関する語りを伴いながら、神秘性も継承される。ここに、親鸞との大きな違いがある。実証的な手続きによって、脱神秘化された信仰優先の教祖像を打ち出した田中智学のように、神秘的な日蓮像が全面的に継承されたわけでない。だが、親鸞の伝記が実証的に検証され、信仰と文学の双方で脱神秘化・人間化された親鸞像が語り出されていったことを踏まえれば、近代化のなかであってなお、日蓮の神秘的性格が求められ続けたことは重要である。

本研究課題の総合的検討としては、東北大学にて国際シンポジウム「近代日本の仏教と文学」を企画・開催し(2023年2月)、ミシガン大学のアワーバック・マイカ氏、大谷大学のミチヒロ・アマ氏、国際日本文化研究センターの末木文美士氏を招聘し、仏教者による文学や釈迦や教祖など仏教者をテーマとした作品について議論を行った。本シンポジウムを通して、日本と欧米の文学研究の違いや、仏教者をテーマとした文学作品の位置付け、近代文学に影響を与えた仏教思想について多角的な視点から検討することができた。仏教という枠にとどまらず、宗教性、あるいは霊的なものに関わる文学をも含めた研究の文学研究の必要性や、仏教とジェンダーの問題についても意見交換を行い、仏教における主要な人物の表象が、伝記や小説、短歌を通して、近代日本社会でどのように形成され、浸透していったのかについて討論を行った。

本研究の期間は、新型コロナウイルス感染症の流行と重なり、図書館等での資料収集や調査が計画通り進まなかったものの、研究課題に関わる成果を発表し、論文や書籍を執筆することができた。関連領域の研究者との意見交換・情報収集についてもオンライン会議システムを活用するなどして研究を遂行した。一方で、教祖のなかでも近代以降にとくに多く創作上(文学・演劇)で語られた親鸞と日蓮に関する資料収集や調査・考察に時間を要したため、最澄や空海のイメージ形成に関する資料調査や考察に十分な時間を割くことができなかった。しかし、研究期間の後半から、前近代における空海の代表的伝記を軸に、空海に関する近代の主要な文学作品を収集、比較検討に取り組んだほか、最澄と空海の対比については関連書籍のリスト化を行い、空海像と最澄像との比較に着手することができた。今後は、明治末から昭和期に刊行された歴史研究の成果および文学作品において、最澄と空海を対応させる語りがいつ、どのように始まったかを検証しつつ、空海像の形成に対して最澄イメージの形成がいかに関わっているのかを考察していく。

宗教者のイメージに関しては近年、西洋や日本における釈迦イメージが、伝記や文学、映画等を通していかに変化し、受容されてきたのかを解明する研究が評価されつつある。しかし、日本では釈迦よりも中心的な位置を占める各宗派の教祖のイメージ形成に関する研究は極めて少なく、各教祖像の構築を考える際に、史実を検証する近代的学問の影響力が過大に捉えられる傾向にある。そのような現状において、教祖像形成における歴史研究と創作の関係性やその実態を問う本研究は、学術的に大きな意義がある。特に欧米の学界においては、概ね19世紀の欧州における歴史小説の生成や意義に課題が集中しており、イエスを題材する小説の位置付けの複雑さなど、教祖像の構築を考える上で日本と異なるダイナミクスを示している。さらに、欧米とは異なり、日本では歴史小説というジャンル自体の流布が、歴史上の人物であると同時に仏教教団の教祖である親鸞や日蓮などを題材とする作品と切り離せない現象であるだけでなく、教祖像は、「作家・学界・大衆・教団」の間の比較的スムーズな交渉を通して形成されてきた。研究はこうした特異な日本の宗教の動態を理解することにも貢献する。

近代日本の教祖像の形成で見られたのは、歴史研究と文学の相互関係という単純な構図ではなく、史実と創作の言説がときに重なり合い、歴史を叙述する語り手/受け手双方の参入によって生み出される複雑な形態であった。明治期以降の史学と近代以降に登場した大衆文学は、どちらも歴史上の人物を扱うものでありながら、実像と虚像という点で相反するものとされてきた。本研究ではこの対立軸を問い直し、教祖像形成の具体的なプロセスや、教祖間のイメージの形成過程の相違を具体的に明らかにすることで、教祖像が史実と創作のそれぞれを通して形成され、社会に受容されていく近代日本の宗教の様態を捉えることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 大澤絢子	4. 巻 19
2. 論文標題 「書評 Richard M. Jaffe, Seeking Skyamuni: South Asia in the Formation of Modern Japanese Buddhism」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本仏教総合研究』	6. 最初と最後の頁 119-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 大澤絢子	4. 巻 39
2. 論文標題 「妻帯する親鸞 近代日本の僧侶家族論」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』	6. 最初と最後の頁 29-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 野呂靖・内手弘太・大澤絢子・亀山隆彦	4. 巻 60
2. 論文標題 「日本における仏教文化と聖者像に関する総合的研究」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『世界仏教文化研究論叢』	6. 最初と最後の頁 41-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 大澤絢子	4. 巻 27
2. 論文標題 「書評 丹羽宣子『僧侶らしさ と女性らしさの宗教社会学：日蓮宗女性僧侶の事例から』 Jessica Starling: Guardians of the Buddha's Home: Domestic Religion in the Contemporary Jodo Shinshu, 那須英勝・本多彩・碧海寿広編『現代日本の仏教と女性：文化の越境とジェンダー』」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 「近代仏教」	6. 最初と最後の頁 86-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤絢子	4. 巻 59
2. 論文標題 「人生論と宗教 石丸梧平の人生創造運動」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『世界仏教文化研究論叢』	6. 最初と最後の頁 168-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大澤絢子	4. 巻 1
2. 論文標題 「物語る」歴史学 親鸞と恵信尼はなぜ夫婦なのか」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『学際日本研究』	6. 最初と最後の頁 114-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大澤絢子	4. 巻 29
2. 論文標題 「演じられた教祖 福地桜痴『日蓮記』に見る日蓮歌舞伎の近代」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『近代仏教』	6. 最初と最後の頁 29-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大澤絢子	4. 巻 30
2. 論文標題 「書評 Michihiro Ama著 The Awakening of Modern Japanese Fiction: Path Literature and an Interpretation of Buddhism」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『近代仏教』	6. 最初と最後の頁 253-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大澤絢子
2. 発表標題 「性に悩む親鸞像の形成 近代日本における歴史研究と文学の相関」
3. 学会等名 第80回日本宗教学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大澤絢子
2. 発表標題 「演じられた教祖 福地桜痴『日蓮記』に見る日蓮歌舞伎の近代」
3. 学会等名 第29回日本近代仏教史研究会研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 OSAWA, Ayako
2. 発表標題 “Miura Sekizo and Theosophy in Modern Japan”
3. 学会等名 1st EANASE international conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大澤絢子
2. 発表標題 「宗祖と戦争 悶える親鸞と戦う日蓮」
3. 学会等名 仏教文学会4月例会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大澤絢子
2. 発表標題 「「英雄日蓮」と修養 偉人崇拜としての宗祖像」
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大澤絢子
2. 発表標題 「仏教婦人の肖像 九條武子の短歌と教化」
3. 学会等名 日本学研究会第4回学術大会国際シンポジウム「近代日本の仏教と文学」
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 岩田文昭・碧海寿広編／赤江達也、大澤絢子、大道晴香、岡本亮輔、葛西賢太、川瀬貴也、菊地暁、末村正代、高尾賢一郎、鶴真一、問芝志保、永岡崇、平藤喜久子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 252
3. 書名 『知っておきたい日本の宗教』	

1. 著者名 近藤俊太郎・名和達宣編・石井公成監修／内手弘太、東真行、中島岳志、藤井祐介、ユリア・ブレニナ、クリントン・ゴダール、ステファン・グレイス、大竹晋、飯島孝良、齋藤公太、碧海寿広、大澤絢子、栗田英彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 556
3. 書名 『近代の仏教思想と日本主義』	

1. 著者名 大谷 栄一、吉永 進一、近藤 俊太郎編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 352
3. 書名 『増補改訂 近代仏教スタディーズ 仏教からみたもう一つの近代』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日本学研究会第4回学術大会国際シンポジウム「近代日本の仏教と文学」	開催年 2023年～2023年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	University of Michigan		